

⑤ 関係の質を高める対話のデザイン ～team OPEN YOKOHAMAの場合～

1 はじまりは「イマジン・
E[イハ]ン」team OPEN
YOKOHAMA成り立ち

・市民参加型都市ブランド
事業イマジン・ヨコハマ

横浜開港150周年を翌年に控えた2008年の初夏、横浜市は開港二百年を見据えた都市ブランドを作るという方向性を打ち出しました。「イマジン・ヨコハマ」と名付けられたプロジェクトのもとで、横浜市民の想いと力を頼りに、横浜の未来像をテーマとして数多くのワークショップやヒアリング活動がおよそ一年間展開され、2010年6月に横浜の未来像を表現する都市ブランド「OPEN YOKOHAMA」が誕生しました。

・なぜ市民参加型だったのか？

今日、数多くの都市において都市ブランディングが実施されています。都市ブランディングではその都市の魅力を発信するためのロゴマークやスローガンなどを作成し、

効果的に世界へ向けて発信することにより、人や企業を惹きつけ、地域を活性化させることをゴールとしますが、一部の有識者やコンサルタントらの集まりにより行われるケースが多く、結果として、市民には関係のないところで、自治体による都市プロモーションだけに使われるということも珍しくありません。

市民が都市のブランドに愛着をもつには「自分ごと」と感じることがもつとも重要です。このため都市ブランディングの担い手となる市民がそのブランドを創るという思想が生まれたのです。370万人に迫る人口を抱える横浜は国内最大の市であり、市民が横浜の魅力を発信することができれば、大変に力のある情報発信にもなります。

イマジン・ヨコハマの結実としてのOPEN YOKOHAMAの最大の特徴、独自性は、わたしたち市民の想いを集めて作られたことにあります。イマジン・ヨコハマは横浜市が主催したプロジェクトでした

が、有識者だけが検討して決めるものでも、行政主導で決めるものでもなく、「市民参加型」という、都市のブランド構築としてはあまり例を見ないような手法が用いられたのです。

市民の横浜への想い・意見を収集・集約してブランドを構築することにより、市民の横浜への誇り・愛着心の高まりにつなげよう。市民同士が横浜の未来を語り合い、その中から導きだされた未来像を都市ブランドとすることにより、市民の想いを未来につなげていこう。市民一人ひとりが主体的に参画することにより、「横浜への誇り・愛着が高まる」↓「横浜の未来を自分のこととして考え、まちづくりへ参加する」↓「より魅力的なまちが形成される」↓「都市ブランドの向上につながる」という好循環を起こすことが期待されました。イマジン・ヨコハマは、874名のボランティア登録、延べ35回の市民によるワークショップ、約3千人へのインタビュー、約87万件の感性調査

などを経て、多くの人びとの想いが染み付いた都市ブランドOPEN YOKOHAMAを作り上げたのでした。

・イマジン・ヨコハマの挑戦
～共創・参加型アプローチ

横浜の370万市民の多様性を反映するために、イマジン・ヨコハマでは、幅広い層からボランティアを集めることにも力が注がれました。その結果、30代から40代の現役世代、会社員の割合が高くなりました。

イマジン・ヨコハマの活動のなかでも、市民自身の企画・実施による「出張ワークショップ（ワールドカフェ）」は特筆すべきものでしょう。2009年3月に開催されたキックオフワークショップや同年5月に開催された500人ワールドカフェ（写真1）を通じて、「自分たちもワールドカフェを開催してみたい」と思っ立ち上がった方々が25ものワークショップを企画し、ファシリテーターを務めました。いくつものチームが「場所」「日時」「ワー

執筆

team OPEN YOKOHAMA

飯田 正男

兎洞 武揚

早川 聡一

松野 智義仁

三角 明子

米満 東一郎

政策局政策課担当係長

写真1 500人ワールドカフェ（パシフィコ横浜）



ルドカフェを構成する三つの「問い」などといったことをゼロから話し合い、実施しました。チームごとにワークショップのターゲットが異なることで、様々な世代・文化・地域の想いをすくいあげることでできたのではないでしょう。それがそれぞれのワークショップの中で、企画した人、参加した人が「その場でどんな人と出会い、どんなことを聞き、どんなことに共感したか」を大切にし、個々の知をさらに持ち寄り、集合知とすることで、横浜の新しい都市ブランドはできていきました。

・ イマジン・ヨコハマから team OPEN YOKOHAMA へ

イマジン・ヨコハマのボランティア活動は2010年3月開催の「横浜の未来を語るワークショップ」を以て終了しました。この最後のワークショップでは、アクションを生み出し、それを育てていくことがOPEN YOKOHAMAの成熟につながるという考えから、オープン・スペース・テクノロジー（OST）（41ページ参照）と呼ばれる、参加者の想いの発露に適した手法が取られました。都市ブラ

ンド OPEN YOKOHAMA のさまざまな担い手の想いの種を発芽させ、プロジェクトとして育てていくためのワークショップとなり、ここから11のプロジェクトが生まれました。

そのうちの一つが、イマジン・ヨコハマが採用した「対話」という手法によってまちづくりを進めていこうとする「有志によるイマジン・ヨコハマの継続」プロジェクトで、このプロジェクトから、わたしたち team OPEN YOKOHAMA(以下、tOY)が生まれました。

2 tOYとは—まちに「対話の〔場〕」を造りだす

イマジン・ヨコハマは、性別や年齢、職業や肩書き、立場や背景の異なる者同士が個人として対話をしていく中で、気づきや発見が起こり、連鎖し、想いが膨らみ、一人ひとりが生き生きとしてくるような、瑞々しいパワーが沸いてくるような、そんな素晴らしいプロジェクトでした。わたしたちは対話という行為が生み出すエネルギーを目的に勝つことを目指す「議論」とは異なり、対話では相互理

解を目的に相手の話を聞き、アイデアを持ち寄りながら共通基盤を築いていきます(表1)。

イマジン・ヨコハマから生まれたtOYも、対話の手法を継承して、横浜の未来につながる対話の場を創造するという目的を持っています。イマジン・ヨコハマに携わった当事者として、対話が、自分の住んでいるまちのことを好きになり興味を持つきっかけになる、新しいつながりを生み出す、今よりさらにわくわくする毎日への一歩になる、他の都市のまちづくりのヒントにもなる、そう実感したからです。

イマジン・ヨコハマで特に重視されたのは、「関係の質の向上」でした。例えば、会社組織では、良い結果を出すために、一人ひとりの社員がより良いものを生み出すこと、すなわち「行動の質」が高いことが必要です。行動の質を高めるためには社員一人ひとりが良い発想を持つこと、「思考の質」を高めることが重要です。そして思考の質を高めるためには、社員同士の「関係の質」を高めることが大切です。上司と部下の関係が悪いと、なかなかよい結果は生まれません。逆に、

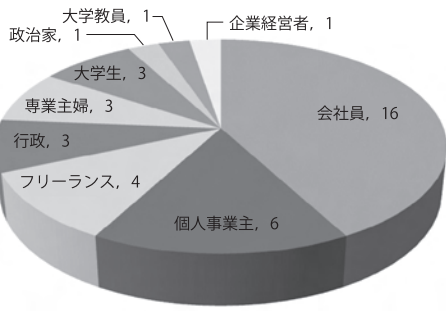
お互いを認めあい尊重しあえるなど、社員同士の関係が良いと、会社内にも良い雰囲気が生まれ、一人ひとりのモチベーションも上がり、実行力や発想力も高まっていきます。このサイクルを、イマジン・ヨコハマでは、「まち」に当てはめました。まちを構成する多様な人が集まり、対話を行う中で、立場・世代を超えて質の高い関係性を結んでいくことこそが、まちがより魅力的で素晴らしいものに

表1 議論（ディスカッション）と対話（ダイアログ）のちがいを

| | ディスカッション | ダイアログ |
|-------|-----------------------------------|--|
| 目的 | 勝つこと | 共通の基盤を探すこと |
| 前提 | 正しい答えがあるはずだ。それは自分の答えだ | 誰もが良いアイデアを持っているはずだ。それらを持ち寄れば、良い解決案が見出せるだろう |
| 態度 | 戦闘的：参加者は、相手が間違っていることを証明しようとする | 協力的：参加者は、共通の理解を目指して協力する |
| 聞き方 | 相手の欠点を探しながら、そして反論を組み立てながら、相手の話を聞く | 理解しよう、意義を見出そう、同意しようとして相手の話を聞く |
| 評価 | 相手の立場を批判する | すべての立場を再調査 |
| 自説の扱い | 相手の見解に反対し、自説を主張する | 相手の考え方を取り入れれば自分の考えも改善できると認める |

(出典：香取一昭、大川恒『ホールシステム・アプローチ』)

表2 t O Y企画メンバー構成



- 個としてのフラットな話し合い
 - 出入りが自由な環境
 - 多様性のあるメンバー構成
 - 自然に作られていく場
- なるための原点だと考えたのです。そのために必要なのが「対話のデザイン」です。
- t O Yはこの「対話のデザイン」を事業の中心にしています。対話から起きるパワーを経験しているからこそ、様々なことに対話を取り入れてみよう、対話から生まれたOPEN YOKOHAMAも対話で広めていこう、対話の楽しさ・面白さ・素晴らしさ・奥深さを知ってもらいたい、という発想です。ですから、わたしたちのやり方自体も対話の考え方をベースにしています。

■ 気づき・発見のある場
強要しない、否定しない、無理をしない。やらされるのではなく、やってみようとする姿勢。お互いの違いを認め、その上で異なる意見が交じり合い、肯定がつながっていくようなポジティブなアプローチ。新しい関係が生まれ、さち。新しい関係が生まれ、さち。新しい関係が生まれ、さち。新しい関係が生まれ、さち。

対話は、わたしたちの活動を作っていく上でも非常に重要な役割を果たしています。イマジン・ヨコハマへの参加者が発足時の核となったt O Yは、メンバーの多くが30〜40代の働き盛りの世代です。仕事も、会社員（広告代理店、テレビ局、金融など）、個人事業主、フリーランス、行政、専業主婦、大学教員など多岐にわたっています（表2）。おのおのの仕事やプライベート、他の活動と折り合いをつけながらt O Yと関わっていくことを選んだ背景には、「このひとたちと話す」と楽しい（「対話を通じて、あたらしいなかが生れてくるのを感じる」という喜びがあります）。

月に一度、平日の夜に開催している運営会にはt O Yメンバー以外の方を含めて誰でも参加歓迎です。参加者は平均すると十二、三名です。短時間のミーティングですが、各人によるチェックイン（最初の挨拶）から始め、集中して話し合える雰囲気を作ります。ホワイトボードなどを使ってその場で議事録を作成し、写真を撮ってFacebookにアップすることで、参加できなかったメンバーとも可能な限りリアルタイムに近い形で情報を共有します。会の終わりに一人ひとりがひとこと発言し、場を閉じていきます（チェックアウト）。わたしたち自身が、「対話」を楽しんでいるのです。

3 わたしたちの実践—t O Yの活動ピックアップ

2011年度、メンバーがそれぞれに「やりたいこと」、「嬉しいこと」を行うことにより、t O Yの核となる活動が見えてきました。

① 18区ワークショップ

横浜についての想いをうかがったり、語り合う場において話題の中心となってきたのは、やはり港とその周辺の歴史や景観でした。横浜を象徴するものとしての「港」の価値は大切にしつつも、もっと個別の、パーソナルな空間に愛着を持っていきたい。その一歩として、横浜の18区それぞれでワークショップを実施したいと考えました。

わたしたちが考えていた「基本セット」は、①OPEN YOKOHAMAへの知識と理解を深める、②ワールドカフェを使う、というものです。区役所との連携を大切にしたいと考え、これまでに中区、戸塚区、都筑区、港北区、鶴見区、保土ヶ谷区に伺い、趣旨の説明をさせていただきました。

どの区役所でも興味を持って聞いていただくとともにアドバイスをいただく、まずは地道に地元密着で活動することになりました。

港北区では区の助成金を得て2011年12月と2012年2月に大倉山記念館で、港北区の魅力テーマにしたワールドカフェを開催しました（写真2）。25人が参加して港北区の魅力や東横線をテーマに対話を行い、「鶴見川がキーワードと思う」、「港北区から富士山が見えることを初めて知った」（以上12月）、「東横線はオシヤレで

写真2 今日は、港北区の話をしよう！



（参考）t O Y 2011年度主催行事

- ・ 2011年
- ・ 4月3日（日） 「今感じてること」を聴き合うダイアログ
- ・ 5月21日（土） ダイアログ・コイ
- ・ 7月3日（日） ダイアログ・コイ
- ・ 9月4日（日） ダイアログ・コイ
- ・ 10月20日（日） まち歩き対話
- ・ 11月20日（日） イキイキ人生☆探求道場
- ・ 12月10日（土） 今日は、港北区の話をしよう（一）
- ・ 12月18日（日） ほどほどがやがや保土ヶ谷語り場
- ・ 2012年
- ・ 2月11日（土） 今日は、港北区の話をしよう（二）
- ・ 2月26日（日） 鶴見みらいファクトリー

クールなイメージだったが、安全安心、温かいといったイメージに変わった」（2月）などの想いが共有されました。

戸塚区では区民活動支援センターをご紹介いただき、こちらの活動への参加が始まりました。保土ヶ谷区では区役所の協力をいただき、2011年12月に保土ヶ谷公会堂で保土ヶ谷の未来についてのワールドカフェを開催、また2012年4月には町歩き+ワールドカフェを開催する企画が進んでいます。鶴見区では2012年2月に鶴見の未来について語り合うワールドカフェを開催しました。いずれの区でも、自分たちの住むまちについて改めて話し合うという場が新たなつながりを生み出しました。

② まち歩きし対話（まちあるきしたいわ）

「まち歩きし対話」は、まち歩き体験とワールドカフェを組み合わせたワークショップです。2011年10月に開催した第一回では、「はじめの横浜」、「横浜とフランス」、「旧い横浜の新しい顔」（写真3）という三つのコースが同時に展開され、最終会場である横浜メディア・ビジ

ネスセンターに49人が集結してワールドカフェを行いました。

ワールドカフェの第一ラウンドでは、「一回だけシャッターを切るとしたら、どこで？それはどうして？」という問いを投げかけ、4人程度のグループで話し合っていたいただきました。数時間にわたるまち歩きという共通体験を基盤に、活発に話が進みます。

第二・第三ラウンドでは別ルート参加者と交わるようにグループ替えをし、「今日気づいた意外なヨコハマは？」などの問いを巡ってお互いの体験を分かち合っていたきました。新しい興味や関心が生まれる瞬間を経験していただけだと思います。

「まち歩きし対話」の手応えを一番感じた瞬間は、対話型イベントにはじめて参加したという高齢の方が、会の終わりに、ワールドカフェでの対話を「いちばん嬉しかった」と発言してくださったとさでした。また、ワークショップの終わりには、ネットを介しての通信手段を持たない参加者の多くが、「次回の案内希望」に記名してくださいました。参加者同士の話もはずみ、後日再会したというお話も聞いています。まち歩きと対話を組み合わせたことによ

り、「関係の質の向上」が起こったのだと思います。

実施側として新しいつながりができることも「まち歩きし対話」の大きな利点です。コースのうちひとつはtOYメンバーではないグループ（ヨコハマトリエンナーレ2011のサポーター活動で知り合った仲間5名）が企画運営を担当してくれたことも、コースに広がりを与えました。

地域密着的なコースでもてなす側の伊勢佐木町六丁目界隈の商店主さんたちにも喜んでいただけたのがさらに嬉しいことです。

2012年度には、保土ヶ谷区役所と協働で4月にまち歩き+ワールドカフェのイベントを開催するほか、中区の商店街をテーマにした企画も進行中です。

③ キャリア・オープン・ヨコハマ（COY）

横浜に縁のある学生、社会人がオープンな対話やワークショップを通じて、社会に貢献すること、生きがいや働きたいについて語り合い、この困難な先の見えにくい時代でも自分らしさを発揮してイキイキとあることを支援するプロジェクトです。人それぞれのキャリアや成長を通して、

横浜の未来のまちづくりに貢献することが願いです。5メートルにおよぶ巨大年表を全員で作成し、グループごとに「work」についてのマインドマップを作りました。

2011年11月に第1回イキイキ人生☆探求道場『work x work』世代を超えて、働くを知る、自分を知る』を実施しました。

15名の参加者を迎え、アイスブレイクのあと、まずは全員参加で5メートルにおよぶ巨大年表作りをしました。上段には世界・社会の動き、下段には「work」に関する自己史を記入していくというもので、60代から20歳前までの多様な参加者がお互いを知り、語り合いました。その後グループに分かれて「work」をテーマにマインドマップを作り、最後に5枚のマインドマップをつなぎ合わせて巨大マインドマップとし、全体での対話の時間を設けました（写真4）。終了後に行ったアンケートでは、「初めての会う人と同じテーマで話せることで共通点や学びがあり、有意義な時間を過ごせた」、「他の世代の方の考えも聞けてとても楽しかった」、「自分が自分の意見を言うことは意義があることだと思えた」な

写真3 まち歩きし対話



写真4 キャリア・オープン・ヨコハマ



どの感想が寄せられました。c O Y の企画メンバー24名のうち約三分の一が現役大学生で、企画そのものを練り上げるプロセスを楽しみながら学び合う場にもなっています。また、c O Y の活動を通じてt O Y に興味を持ち、t O Y 全体に関わるメンバーが増えており、わたしたち全体に新しい風と活力をもたらしています。

4 —そしてこれから

・これからの活動

18区ワークショップでは横のつながりをさらに強化し、ひいては全体として横浜市との連携も模索していきます。同一のテーマを設けて複数の区をまたぐイベントづくりなども新たなつながり作りになるでしょう。

また、ゴールデンウィーク明けの5月12日(土)には、大規模なワールドカフェの開催を企画しています。毎年同時期に繰り返すことで、t O Y のフラッグシップイベントに育てていきたい、そしてゆくゆくは5月の横浜の風物詩の一つにしていけないかと考えています。本誌が発行される頃には詳細も決まっているはずですので、t O Y ウェブ

サイトから情報にアクセスしていただければ幸いです。

・「参加者」から「実施者」へ

さらに育てていきたい活動として、ワークショップの参加者が企画・実施者になるお手伝いがあげられます。さまざまなワークショップに参加する中で、自分でもやってみたいという潜在的ニーズは確実にあると感じます。ですが

一般に開かれているワークショップ講座は商業ベースで参加費が高く、また参加した体験だけをもとに(自習するにしても)実施へとジャンプアップするのはハードルが高いのが現状です。そこで、2011年5月・7月・9月の3回にわたってワールドカフェの体験・企画・実施報告と振り返りを行う市民ファシリテーターの養成講座を実施しました。参加したみなさんが新しい視点とスキルを身につけ、対話を大切にしたいワークショップが数多く開催されるようになることにより、「関係の質の向上」を実感する人が増え、やがては社会が少しずつでも変わっていくことを期待しています。

本年1月には戸塚区役所の職員研修「とつか塾」でワールドカフェ体験講座を開催し

team OPEN YOKOHAMA ジェーン

「ヨコハマを愛する人同士の対話から生まれてくる、個々人の溢れるような想いをそれを実現しよう」として、ヨコハマの未来を自分たちの手で創り出す。team OPEN YOKOHAMA が目指すのはこれだ。

肩書きをはずして、同じ地域に暮らしている人同士で、ゆっくりと話をしてみる。沸き起る想い。自分と同じ想いをもつ人とのつながり、新しい気づきや発見。それは、心で深く感じ、体の奥から力が沸いてくる体験。

地域の対話は、社会に新しい風を吹き込んでいく。

そこに暮らすみんなの望むことが浮かび上がってくるのだから。そして、望むことを実現させていく仲間が現れてくるのだから。

だからこそ、私たちは、想いが語られ、育まれ、自然と共感する仲間が繋がってほしい。だから、「対話の場」を創造してきました。

同じ地域に集う人同士が、つながりを感じながら生きていく。新しい生き方を、新しい社会を、ヨコハマから創り出す。

ました。前述の保土ヶ谷区役所との関わりなどを含め、行政との協働もさらに広げていきたいと考えています。

・おわりに

t O Y の活動の先には、OPEN YOKOHAMA ステータメント(裏表紙裏参照)の実現があります。

わたしたちは、t O Y ビジョンにあるように、地域の対話を通して社会に新しい風を吹き込むことで OPEN YOKOHAMA を描かれた横浜の実現に寄与していけるよ

うにと願っています。さまざまな立場や関心を持つ人びとが共生する多様で寛容性に富んだ街が形成されるには、違いを越えた「対話」が必要不可欠だと信じています。

対話の中で自らの想いに気づき、一歩踏み出して行動する。そのためには、「一人の人間として参加できる雰囲気作り」(多様な主体がお互いの違いを認め合い共創・創造的な対話を行うことができる場づくり)が必要です。それは「対話のデザイン」を行うことで実現可能なのです。

【team OPEN YOKOHAMA 連絡先等】
ウェブサイト：
http://www.teamopenyokohama.org/
代表メールアドレス：
info@openyokohama.jp
twitter: @openyokohama

※第二章は、イマジン・ヨコハマから生み出された「モノ」のひとつ「イマジン・ヨコハマ研究所」がまとめたレポート「イマジン・ヨコハマとはなんだったか」に加筆・引用しました。